端場は織大夫、團六、本來「みす内」の場で、取るに足らぬ役であらうが、端場を語る意義は、その文章の内容を一杯に表現するといふことに在るを心得るべし。

切は古靱大夫、清六、十月興行の義大夫節はこの一段ぎり詞は各役滿點。この段の地合の評は今の評者に出來ぬ。他日研鑽の上論じたい。清六の絃も同斷。

『中　將　姫』

切の前、相生大夫に仙糸。聞及ぶ唐人の寢言とはこの事ならん。

切の奥、叶大夫改め七代目春大夫、絃寛治郎、どう考へても「取り返しのつかぬ事をした」といふのが最も適切な批評と信ずる。寛治郎は居なくともよい。

『琴　責』

伊達、七五三、伊勢、司に綱造の絃で、要するに綱造の、「琴責」。我流さえなければこの人の藝系からいつて、團平の彦六風の「琴責」に對抗して、釘抜きで「三曲」をかき鳴らしたといふ松葉屋系、即はち文樂風の「琴責」の現存形として一應肯定される所はある。

霜月の大阪劇壇

林　秀雄

古靱の賢女鑑

△文樂座霜月興行では第四「日本賢女鑑」が珍らしい。此作の興味は片岡造酒頭が返り忠をするカゲ腹の一事に繫がれて居る。勿論前半迄は宇治の方が紫頭巾に長柄の日傘で出て城中で荒くれ武士を相手に酒宴を始めへ吉野櫻は、の床のツレ連きで足踏みして舞ふところなど變つた色彩ではあるが總體に前半は退屈である。古靱の持場は四十五分程だが最初造酒頭が下手から鍔に竹の子笠を持つてカゲ腹の足取りで出て來る處は榮三の技巧も古靱の息も面白い。

△「ナニ造酒頭を死人とは」から段切迄の相當長い間、榮三、古靱、清六の三人一致の妙技が見られた。文五郎の妻染の井は取立

てゝ言ふ仕處もないし、玉藏の和田も柄だけのもの。これは餘談だがこの「賢女鑑」を延若、梅玉等で上演してみてはどうだらうか。

△大隅の「鎌腹」は番付にも「切」となつてゐるし、實は相當期待して居たのだが例の調子を抑へ過ぎたのか彌作が妙に子供染みて案外に惡いものだつた。人形では文作の和助がアオチを使ひ過ぎてゐるのが目についた。

△「紅葉狩」では紋十郎の更科姫が二枚扇の件りであひ變らず客を喜ばせて居たし「壺坂」ではお里の文五郎が「賢女鑑」の榮三の內面的な藝とは違ひ外形のみに囚はれた使ひ方をしてゐるのか餘りいゝ感じではなかつた。

延若の平作

▲角座の翫雀襲名披露の芝居が二ケ月續演でしかも客足のよいのは先づ以てお目出度い限り。一部變更された狂言の內見ものはやはり夜の「沼津」。

▲去年やつたばかりだから見る方も一寸氣が替らぬが延若の平作は益々手に入つたうまさが窺はれる。體力的に描ききれぬ所は藝の力で補ひ、獨特の技巧も隨所に見られ、それでゐて丸本のツボに倣つてゐるのが何よりだ。鶴之助初役のお米、所詮非力でまだ〳〵研究の餘地もあり、殊に口說きの間など一考を要する。壽三郎の重兵衛も不相變頂戴出來ない。「金のやりたいくつたくに」や「吉田で逢ふたと人の噂」などが惡いのは困る。形よりも心を掴んで貰ひたい。

▲盡の部第二の「野崎村」は大變な代物である。こんなものにまで文樂の連中を出すのは止めて貰ひたいし、翫雀も盡の一役キリは全く氣の毒だ。

▲永田衞吉の「山彦瀞八丁」は再演ものゝが同氏の「義士審判」より作はズツと落ちるし、我當、壽三郎兩人何をやつてもいつも同じなのは困り物。マチネーの「廿四孝」で延二郎の八重垣姫が隨一のお手柄であるのは頼もしい。

低調更生劇

▲狂言五種の內「厚生劇」の意味で出した「北國日和」と「息子」の二篇は矢張この一座のものではない。新生新派で上演した「北國日和」は少くとも都築、梅野井御兩人では無理な芝居である。梅野井は何をやつてもセリフ、仕草に變化がない。男が女になりきつたといふだけではこの芝居では何の價値もない。都築の松造も苦しい演技だ。ワキでは清水一郎の金之助の眞面目さを買ふ。かういふ芝居になると端役の下手のが目につく。

▲小山內薫の名作「息子」を小大夫がやるのも御時勢だが所詮徒勞に終つてゐる。小大夫も惡いが林寛の親父も江戸市井の火の番ではない。小大夫の金次郎に捕吏との殺陣を見せるといふハラがあつたらこの芝居もお仕舞だ。

▲延見子の「追分供養」はお馴染みのものだが、女馬子お谷へ辻り落ちると奥にゐる馬がノコ〳〵前へ出て來てその背中にある鞦で助かると言ふ出鱈目な演出でも見物には浪曲と共に大受けである。嬉しい芝居だ。